



# 建築設備技術遺産

認定第 23 号 「衛生装置を設くる方へ(住宅衛生工事解説)」,  
「パイロット組立式住宅衛生装置説明書」,  
「パイロット式濾水装置説明書」

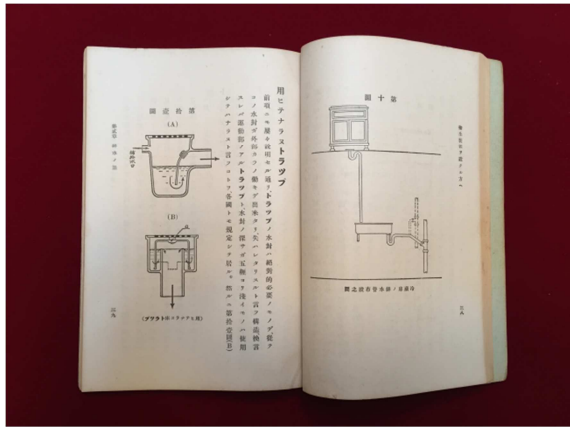
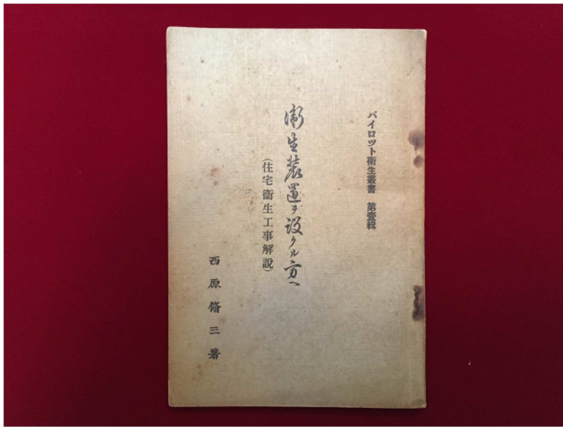
管理者:いするの家 西原脩三記念館

所有者:株式会社西原

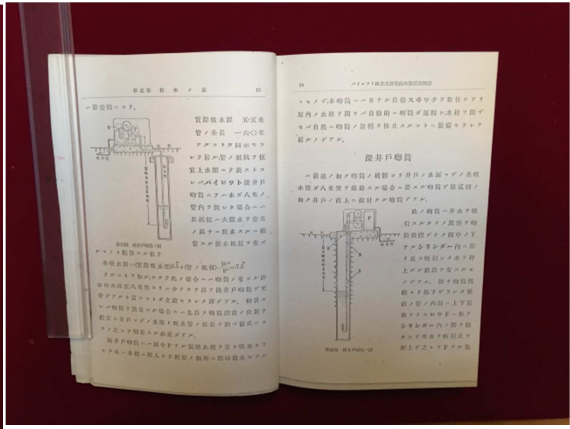
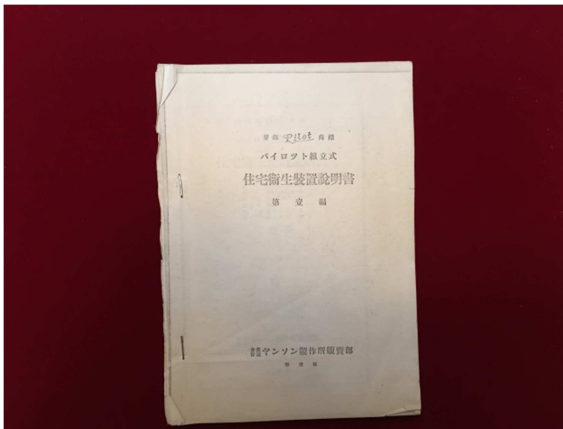
給水とトイレの歴史は都市・建築環境と切り離せない。新しい方式が考案されても、古いシステムは残りその変化はきわめて緩慢である。都市が近代化するとともに新鮮な水の供給要求は高まり、それに伴い人間の排泄物の処理は自然の浄化作用だけでは成り立たなくなった。水道事業は、都市の拡大とともに自治行政の大きな課題になった。一方で水流方式便所時代は直接下水道に汚物を流し去る方式がとられたが、河川の汚染が衛生問題を引き起こした。都市環境を汚染するこの処理方式には限界が生じ、19 世紀中頃から欧米の諸都市で下水道が整備され 20 世紀前後には処理場も作られるようになった。わが国では諸外国からの技術移転によりこの問題を解決した。これらの普及を成り立たせた技術の中に、水栓金具を含む技術がある。

わが国では 1890 年代に給水管に鋳鉄管の採用が国産化され、その後、鋼管の使用が盛んになるのは 1920 年代(大正末期)で、米国からの技術・製品輸入とともに広がったアメリカ式に移行することで、普及が進んだ。しかし、先に述べたように普及の進展はそれほど早くなく、外国人が借りた日本家屋に衛生設備の設置が要求されるなど、製品の供給は輸入品のみでは対応できないという状況があった。衛生設備の製品がすべて海外製であるため、外国人の指導で、造船場などで金属加工を行っていた日本人の銅工職人がブリキやパイプを作り取り付けたという時代もあった。西原修三は、1923 年(大正 12 年)9 月 1 日発生した関東大震災で海外製品の輸入が困難になったこともあり、市場に不足した製品の国産化のために 1924 年にドイツ人技師の A・P・テーテンスとヤンソンの賛同を得て東京、大森に「合資会社ヤンソン製作所」を設立し「パイロット印高級衛生・暖房・金具類」の製造を始めた。

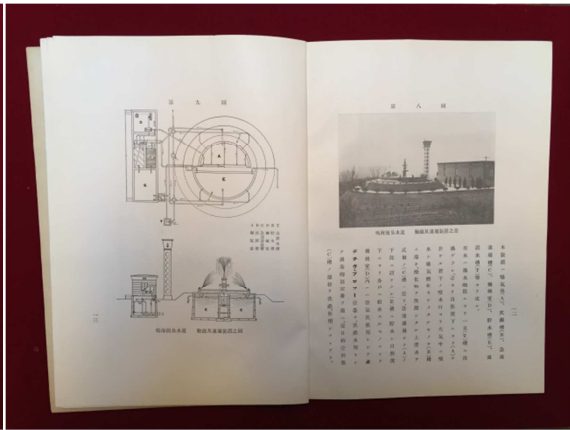
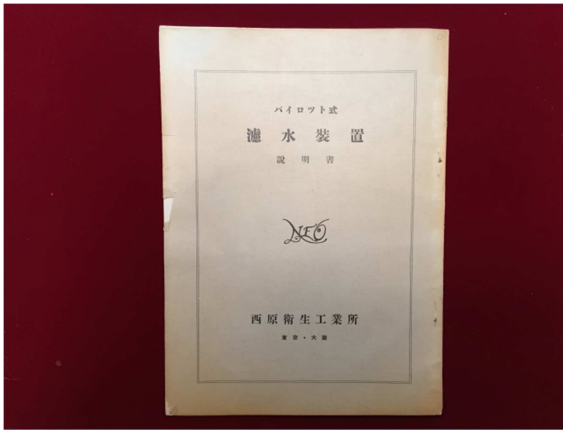
このような時代背景の中 1930 年代(昭和初期)に発刊された『衛生装置を設くる方へ(住宅衛生工事解説)』、『パイロット組立式住宅衛生装置説明書』、『パイロット式濾水装置説明書』の「住宅衛生設備の解説書類」は、衛生設備の普及を支えた資料である。一見、現代の技術資料が含まれるカタログのようにも見える。しかし、内容は国産の製品の普及促進のための技術をコスト比較と技術解説を交えて平易な内容で解説したもので、本資料は、わが国の衛生設備の普及に技術者たちが参考にするなど多大な貢献を果たしたものであり、建築設備技術遺産の認定に値するものである。



衛生装置を設くる方へ(住宅衛生工事解説)



パイロット組立式住宅衛生装置説明書



パイロット式濾水装置説明書